

「総合的な表現活動」の教育的効果の検討：受講した卒業生への現状追跡調査による分析

著者	智原 江美, 和田 幸子, 田中 慈子, 下口 美帆
雑誌名	京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究 紀要
号	59
ページ	199-211
発行年	2022-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00001063/

「総合的な表現活動」の教育的効果の検討

—受講した卒業生への現状追跡調査による分析—

智 原 江 美
和 田 幸 子
田 中 慈 子
下 口 美 帆

Keywords 表現活動・感性・保育者養成

要 約

自由な表現を受け止める感性、豊かな指導力を備えた保育者を養成するため、平成27年度より音楽・造形・身体・言葉表現の各領域を連携させ、総合的に学習する「総合的な表現活動」の授業を開講してきた。これまでの授業内容を検証し、今後の内容改善の手がかりを得るため、総合表現の授業を受講した卒業生にアンケート調査及びインタビュー調査を実施した。

その結果、授業で経験した様々な感覚は個々の記憶の中に何らかの形で残っており、それらの経験は保育における表現力や発想力として、また、子どもの表現の読み取りや子どもに対する働きかけとして活かされていることが分かった。そして、総合的な表現活動を経験したことが個々の子どもの表現を受け止めることや表現形態に対する自由な発想・表現の多様性に気づく機会となっていると捉えることができた。

I. はじめに

筆者らは子どもの自由な表現を受け止める感性、型にはまらない自由で豊かな指導力の養成が重要であると考え、平成27年度より音楽・造形・身体・言葉表現の各領域を連携させ、総合的に学習する「総合的な表現活動」の授業に取り組んできた。授業の流れや内容については各年度の授業担当者間で検討し、相談を重ねながら授業を進めてきた。毎年の授業を振り返り改善を重ね、総合的な表現活動の授業を実施してきた。

平成27年度の本学短期大学部での授業では、2年次に音楽、造形、身体、言葉の各表現を連携させた活

動とした科目「保育実践演習」を開講し総合的な表現活動に取り組んだ。四年制大学の学科開設以降は、造形と身体表現の活動を「総合表現Ⅰ」、音楽と言葉表現の活動を「総合表現Ⅱ」、4領域すべてを連携させた活動を「総合表現Ⅲ」として、全3科目を開講してきた。

保育者養成課程では、幼稚園教育要領や保育所保育指針に記されている保育内容「表現」の趣旨を踏まえた演習科目を開講することになっている。音楽・造形・身体表現をオムニバスで学修する授業実践、さらにはそれらの総合的な表現をオペレッタやミュージカルであると位置付け、その公演を目標として取り組む養成校もある(今2015)。しかし筆者らは、既成の音楽、ダンス、セリフを用いるのではなく、子ども自身が音、形、色、手触り、動きを手がかりに表現を創出していく主体であると捉え、これらの表現素材を総合的に表現として展開していくための授業開発をしてきた。保育場面において保育者と子どもたちがオノマトペと身体の動きを連動させた表現をする際に、拍の流れ、繰り返し、問と答えといった音楽形式が含まれていたという岡林らの報告は、筆者らの子どもの表現の捉え方を支えるものとなった(岡林他2016)。筆者らも保育者養成教育において、そのような総合的な表現活動を目指す授業づくりに取り組んできており、これについてはその都度報告²⁾を行ってきた。造形表現・身体表現・音楽表現・言葉表現のそれぞれの分野の表現の可能性を探った上で、複数の分野を包括させた表現創作を試みたのである。同様の問題意識を持つ山田らも、奇しくも同様の授業展開をしている(山田他2019)。

では、これらの総合的な表現活動を学んだ保育者養成課程卒業生が保育職に就いた際にどのように活用しているのか、また保育における表現活動をどのように

捉えているのだろうか。追跡調査をもとに、今後の保育者養成課程での総合的な表現活動の授業内容を再構築していく必要があると考えた。

そこで、総合的な表現活動の授業を受講した卒業生に郵送でのアンケート調査を実施し、回答者のうちインタビュー調査対応可と記載があった卒業生にはインタビュー調査を実施した。

アンケート調査およびインタビュー調査の回答より、これまでの総合表現の授業内容について検証し、その結果をもとに今後の総合的な表現活動の授業内容改善の手がかりを得ることを本研究の目的とする。

Ⅱ. アンケート調査の実施と結果

令和2年10月に、総合的な表現活動をテーマとして開講した「保育実践演習」を受講した本学短期大学部平成28年3月卒業生55名、「保育内容V（総合表現Ⅰ～Ⅲ）」を受講した本学こども教育学科幼児教育コース平成31年3月卒業生50名、および同令和2年3月卒業生63名、合計168名を対象に、郵送形式でのアンケート調査を行った。

質問項目は、以下の通りである。

〈回答者自身について〉

1. 出身学科および卒業年
2. 勤務の経験（職種）および年数
3. 保育者としての担当学年および担当年数

〈在学中に履修した「総合的な表現活動」の授業について〉

4. 在学中に履修した総合的な表現活動の経験は何らかの形で残っているか。
5. 在学中に総合的な表現活動を経験したことにより、表現活動に問題意識をもつきっかけとなったか。
6. 総合的な表現活動の経験は感性を開くきっかけとなったか。
7. 今後、担当する保育において行ってみたいと考える表現活動はあるか。
8. 保育の表現活動について感じていることについての自由記述。

質問項目4から7までは、「はい」または「いいえ」のどちらかで回答したのち、その具体的内容を記述する形式とした。

令和2年10月初旬に調査票を発送し、10月末までに回答の返信を依頼した結果、得られた回答数は発送168名のうち14名であった。14名のうち3名は保育者としての勤務経験はなく、分析の対象となる回答を得られたのは11名であった。得られた回答数の少なさからは、保育者としての勤務5年目、2年目、1年目の仕事の多忙さも伺えたほか、表現に関する回答を文章で記述することの難しさがあったことも伺えた。

アンケート調査から得られた回答と自由記述を表1から表6に示す。（表中の単位：人）

表1. 質問①卒業年、②職種および勤務年数の回答

質問① 卒業年	人数	質問② 職種	人数
短大 平成28年3月 (勤務年数 4年6ヶ月：6名、 3年4ヶ月：1名)	7	幼稚園教諭	1
		保育所保育士	5
		こども園保育教諭	1
大学 平成31年3月 (勤務年数 1年6ヶ月：1名)	1	幼稚園教諭	0
		保育所保育士	0
		こども園保育教諭	1
大学 令和2年3月 (勤務年数 6ヶ月：3名)	3	幼稚園教諭	0
		保育所保育士	2
		こども園保育教諭	1

表2. 質問③保育者としての担当学年についての回答

職種	担当学年	人数
幼稚園教諭	2歳児	1
	3歳児	1
保育所保育士	0歳児	1
	1歳児	3
	2歳児	2
	3歳児	3
	4歳児	2
	0・1・2歳縦割	1
	フリー	1
こども園保育教諭	0歳	1
	1歳	1
	3・4・5歳縦割	1

回答者は勤務1年から5年以内であり、0・1・2歳児の担任である割合が圧倒的に多い。

質問④「総合的な表現活動が何らかの形で残っているか」についての回答は、「はい」9名、「いいえ」1名であった。「うまくすることが目的ではなく、身体表現やオノマトペで自然に表現することを引き出すような活動」として残っているという記述が見られた。

質問⑤「総合的な表現活動の経験は表現活動に問題意識を持つきっかけとなったか」については「はい」5名、「いいえ」4名の回答であった。「自由な表現の大切さ、自分の中で決まりを作らず柔軟な考え方が大切であることが子どもたちを見ていて感じる」や「普段の保育で積み重ねてきたことを自然体で表現し、仲間と作品を作り上げる過程を共有することが大切と考えるようになった。授業で他者との一体感を楽しんだことでより思いが強くなった」との記述が見られた。

質問⑥「総合的な表現活動の経験は感性を開くきっかけとなったか」についての回答は、「はい」8名、「いいえ」1名であった。「具体的な表現や言葉で伝えることの難しい0歳児や発育のゆっくりな子どもが楽しみ、通じ合うためのアプローチを学んだことが活かされていると感じる。また、そのアプローチを設定するために身近な物事にヒントがないか目を向けるようになった」との記述があった。

質問⑦「今後、担当する保育において行ってみたい表現活動はあるか」についての回答は、「はい」8名、「いいえ」1名であった。「好きな絵本をもとに楽器を用いて効果音や曲を作ったり歌詞をつけたりする遊びを授業でも行った。自然を身体表現したり伝言ゲームなどを楽しむことで様々な表現活動を楽しみたい」、「ピアノ、歌を使った身体表現。決まった形で行うのではなく、もっと音楽に合わせて自由に体を動かせるようなものを」といった具体的な活動の記述がみられた。

質問⑧「保育の表現活動について感じていること」についての自由記述としては、「表現活動は楽しむことで心を動かすことが目的だと授業、研修で学ぶが、実際にはやることを目的にしまっていていたりし、それを大事と考える保育者・保護者との折り合いが難しい。子どもができる能力で楽しみつつ、また、見ても良いと感じる活動を作る難しさがある」や、「表現は様々な領域が存在し、自由で果てしない分野と感じる。子どもならではの発想や感覚を引き出し、生かしていくことで子どもの経験値、人格形成に繋がると考える。全ての領域の中に『表現』の存在が必要不可欠である。子どもたちには少しでもたくさんの表現に触れ、豊かな心、生き方が育つ人になってもらいたい。そのために自分の感性も常に磨いていきたい」といった記述がみられた。

Ⅲ. インタビュー調査の実施

アンケート調査の回答でインタビュー調査の実施可と答えていた卒業生5名に加え、改めてインタビュー調査を依頼し承諾を得た卒業生2名、合計7名に対して、Zoomによるインタビュー調査を行った。インタビューの実施には筆者らのうち少なくとも2名があたり、アンケート調査回答者へは回答をもとに、より具体的内容について尋ね、未回答者へは改めてアンケート調査で尋ねた内容も含めてのインタビューを行った。特にアンケートの質問⑧で尋ねた、「日頃の表現活動について感じていること」の自由記述部分について、インタビューによってさらに詳しく尋ね、総合的な表現活動を体験した卒業生が、保育現場でどのようなことを考えているのかについて確認したいと考えたからである。

インタビューに応じたのは平成28年3月短期大学部卒業生が3名（内訳：幼稚園教諭1名、保育所保育士2名）、平成31年3月大学卒業生3名（内訳：幼稚園教諭1名、保育所保育士1名、こども園保育教諭1名）、令和2年3月大学卒業生1名（こども園保育教諭1名）の合計7名である。

インタビューの質問項目は大別すると、①在学中の総合表現の活動を経験して残っている事柄、②日ごろの保育の様子や行事、表現の活動に関して感じていること、③今後、保育の中で行ってみたい表現活動等について、である。それぞれのインタビュー調査の詳細を以下に示す。

インタビュー① Aさん

卒業年：2015年3月 短期大学部卒業

現在の状況：幼稚園勤務、現在4年8か月、3歳児担任

インタビュー日時：2020年12月17日 19:30 - 20:35

【インタビュー内容】

- ① 在学中の総合的な表現活動を経験して残っている事柄
- ・活動記憶が曖昧であるが、グループ活動をする際、積極的に意見を出し合うことも多く、恥を捨ててやろうという雰囲気がグループ内にあった。
 - ・授業中、人前で発表する機会をたくさん経験し、恥ずかしがるよりも一所懸命の方が子どもも

返してくれることが多いことを学んだ。

- ・「楽しめるもの」、演じる側だけでなく、観に来てくれた園児も一緒に楽しめる作品作りを目指した。

② 日ごろの保育の様子や行事、表現の活動に関して感じていること

- ・作品展も劇発表会も、基本的に保護者に見せることを意識して、厳しく子どもに教え込むため、出来上がりのクオリティが高い。
- ・作品展も劇発表会も、テーマ（絵本）を学年ごとに決めて作る。
- ・日ごろの保育も子どもの想いを汲み取るよりも、先生からおろす保育。絵画指導、英語遊び、知育遊びなど、教育に力を入れている。

③ 今後、保育の中で行ってみたい表現活動

- ・ピアノを使った身体表現遊びを保育でやってみたい。
- ・保育室全体を使って自由に子どもたちを遊ばせてあげたい。

④ その他

- ・お絵描きでは、園における「綺麗な」色や「汚い」色があり、「汚い」色は使用禁止である。「綺麗な」色はこれ、という意識が子どもたちの中に出来上がっていく。もっと子どもに伸び伸びとさせてあげたい。
- ・ダンスも自由な表現はなく、動きが決まっている。

〈インタビューを終えての小考察〉

得意のピアノを活かした保育がしたいと希望して幼稚園に就職したAは、在学中の授業においては、『しあわせをよぶ音楽隊』を結成してグループ活動を行った（写真1）。招いた園児を前に、メンバーは各々、多種多様な楽器や役柄を担当して、「ラデツキー行進曲」や「道化師」などをメドレーで演奏発表し、Aはピアノを担当した。インタビューを進めるうちに、グループ内で積極的に意見を出しあったこと、恥を捨てて園児の前で発表した記憶が蘇ってきた。演者（学生）と観者（園児）ではなく、オープンスタイルで行ったため、園児と学生が直接触れ合うことができ、両者が楽しさを分かち合える発表であった。

現在、Aが勤務する幼稚園は、カリキュラムがしっかり決められている園のため、在学中に経験した、領

域がミックスされた表現活動は行っていないが、一つのテーマについてグループで話し合った経験は活かしているように思うとのことであった。Aは、日ごろの保育も行事も、決められた型に添って教員が子どもに教え込むため、作品の仕上がりの質は高く見えるが、学年が上がるごとに子どもの個性が画一化される危険性があると感じていた。

インタビューを通して、園の保育観に従わなければならない気持ちと、こうありたいという自身の気持ちに葛藤しつつも、最終的には、子どもたちを自由に表現させてあげたい、というA自身の強い思いが読み取れた。Aが、今後どのような保育を行っていくのか、また、現在の保育内容を自分の言葉で語った今回のインタビューの機会が何らかの影響を及ぼすのか、継続して調査を行っていききたい。



（写真1）『しあわせをよぶ音楽隊』

インタビュー② Bさん

卒業年：2015年3月 短期大学部卒業

現在の状況：保育園勤務、現在5年目、3歳児クラスを1人（補助の職員あり）で担当

インタビュー日時：2020年12月6日 13:00 - 14:15

【インタビュー内容】

- ① 在学中の総合的な表現活動を経験して残っている事柄
- ・保育実習室の端から端まで、幅いっぱい使っていた。
 - ・Xさんが絵本『なみ』を静かに閉じて静けさを感じさせる間があった。
 - ・色のない、シンプルな絵本、文字も多くなかった。（実際は、文字はない絵本）
 - ・鳥を担当した。
 - ・布で大波、中波、小波を表し、海がキラキラと

光る様子を布の上に小さな紙をふりまいた。

- ・子どもの上を波（布）が通り過ぎたり、波の音を工夫したりした。
- ・たのしかった。
- ・たくさん相談した。

② 日ごろの保育の様子や行事、表現の活動に関して感じていること

- ・表現の活動は、発表会（お話を劇に仕立てる）のためにしている。
- ・園の劇指導のやり方があり、その流れでしている。

③ 今後、保育の中で行ってみたい表現活動

- ・発表会に向けての劇、運動会に向けてのダンス、ではない表現活動をやってみたい。

④ その他

- ・クラスでは、ピアノやタンバリンを使ったリトミックをやっている。
- ・造形表現は、毎年、時期ごとに作るもの、描くものが決まっており、疑問を感じながら行っている。

〈インタビューを終えての小考察〉

Bは、短期大学の「保育実践演習」の授業において、絵本『なみ』に基づいた創作表現のグループ発表を行った（写真2）。寄せては返す波の様子や音、鳥の声などを、ブルーシートや布、すずらんテープなどの素材と全身を使って創作表現した。Bにとって、時間と空間を存分に使って絵本の世界観を創り上げたグループ活動が、印象深い経験であったことがインタビューから察せられた。

みんなで話しあって作品を作り上げる過程が楽しかったことから、Bは、保育園で3歳児の劇指導時に、子どもの動きやしぐさ、そして言葉をできる限り拾い上げて作品創りを行うよう心がけており、授業での経験を自分なりに保育に生かしていると捉えていた。

また、現状としては、造形、音楽、と単独領域で表現活動をしているが、「まさに、子どもは〇〇しながら〇〇している」と気づいたきっかけは、短大時代に複数の領域にまたがる授業で培われた感覚が影響しているのではないかとBは考えており、今後、領域がクロスした総合的な表現活動を保育に取り入れたいと述べていた。



（写真2） 五感を働かせた表現作品『なみ』

インタビュー③ Cさん

卒業年：2015年3月 短期大学部卒業

現在の状況：保育園勤務 4年6ヶ月 現在3歳児クラス担当

インタビュー日時：2020年12月2日 18:00 - 18:35

【インタビュー内容】

- ① 在学中の総合的な表現活動を経験して残っている事柄
 - ・あまり覚えていない。
 - ・1年目は園の特色や先輩の保育など、日々覚えることがたくさんあって、大学のことを思い出すことがなかった。
 - ・もし一年目に 担任を持っていたら、日々の保育で活かせることがあったら思い出して実践してみようと思うかもしれない。
 - ・大学の時あんなことこんなことを学んだと思うことを思い出したらあるけれど、実際にやることは難しいと今は思う。
- ② 日ごろの保育の様子や行事、表現の活動に関して感じていること
 - ・ピアノを聞いたり歌ったりするとき子ども自身が振付をやりたいようにやっている時がある。
 - ・リトミックやっけていても子どもによって「かえる」の表現がちがっている。
 - ・今は発表会に向けて、音劇 CDに合わせて踊ったりしている。
 - ・子どもが好きにやっている動きを吸いあげて作品にすることはある。
 - ・4歳はオベレッタ ピアノで進めていく話だから、決まった踊りはなくて、子どもが動きをオリジナルで決めてすることはある。
 - ・園によってやりかたがある。全国的に共通じゃ

ないから難しいと思っている。

③ 今後、保育の中で行ってみたい表現活動

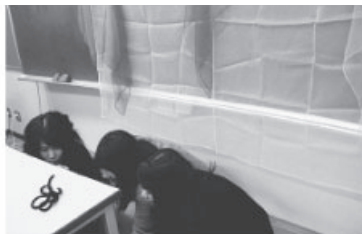
- ・ルールのある遊びが課題である。

④ その他

- ・男児の中では粘土遊びがブームとなっている。作ったものから、動かしたりごっこ遊びに発展している。
- ・オノマトペや言葉のリズムが面白い絵本は子どもたちは笑って聞いていて人気である。

〈インタビューを終えての小考察〉

Cは短期大学部、「保育実践演習」の授業で絵本『いろながれかたちうごいてぱびぶべほ』をテーマにした表現に取り組んだ(写真3)。本授業での経験について、インタビュー中では保育士となった初年度は担任を持たない加配として勤務していたこともあり、自身で保育計画を立案する立場になく、保育の特色や先輩の保育内容など覚えなければならぬことがたくさんあったため、大学で学んだことを思い出して実践する機会がなかったとのことであった。現在の保育について質問した際には、リトミックの時、子どもによって「かえる」の表し方が違うことや、粘土遊びからごっこ遊びへの広がり、オノマトペや言葉のリズムが面白い絵本、リズム遊びをする子どもの様子などについて豊かに語っており、日々の保育の中で子どもの表現をキャッチし、表現や遊びを広げていく視点を持って保育を行っている様子が伺えた。これらのことは、本人にとっては本授業で身についたものではないかもしれないが、本授業の、様々な領域と関わり合いながら表現(子どもにとっては遊び)を豊かにしていくという内容と合致している。



(写真3) 花火の音をつくる

インタビュー④ Dさん

卒業年：2019年3月 大学こども教育学部

現在の状況：こども園に1年9か月勤務 0歳児クラス担任2年目

インタビュー日時：2021年1月13日 11:00 - 12:00

【インタビュー内容】

- ① 在学中の総合的な表現活動を経験して残っている事柄
 - ・表現に正解はないと感じた。「こうしないといけない」ことはない。授業でこのように感じる事が鍛えられた。
 - ・音を出すパートを担当。思い返すといろいろな表現をして、楽しかった。
 - ・授業をしているときは「何をしているんやろ」という感じだったが、思い返してみると、それが好奇心の始まりといえるし、どうしてこの表現につながっているのか考えて自分が納得する答えを出す経験になった。
 - ・活発なグループだった。やればやるほど最初に思っていた方向から離れて、変な(個性的な)方向に進んでいった。ボディソックスは悪ふざけのような面もあったけれど、大学でしかできない思い切った表現だった。
- ② 日ごろの保育の様子や行事、表現の活動に関して感じていること
 - ・0歳児の前半では素材(プチプチシート、新聞、小麦粉など)の感触や体を動かすことを楽しんだりすることが多い。後半1歳を過ぎたころから、絵本を用いて物語性を持たせたり、制作物をごっこ遊びに使うなど応用している
 - ・発表会は例年大きなホールで行っていたが、社会状況から今年は園のホールで行っている。「かわいいかくれんぼ」に振りをつけたり、手遊び・歌遊びなどを予定。0歳児だと名前を呼ばれて手をあげて返事をするなど普段の活動の延長。
 - ・自分の方針としては子どもの内から出てくる活動を大事にしている。ダンスの動きなども、子どもから出てきたものを否定せず、子どもの思いを尊重する。子どもがしたことに対して、自分がどのように反応するかが大事と考える。

③ 今後、保育の中で行ってみたい表現活動

- ・言葉を覚えてセリフを言うのではなく、体の動き・音・表情のみで行う劇遊びをしたら面白そうだと考えている。

④ その他

- ・0歳児の保育においては総合的な表現活動で経験した、ことばではない表現・動きと音さえあれば何とか伝えられることの経験は大きい。総合表現での経験が0歳児の表現を読み解く基礎になったと思う。
- ・総合的な表現活動の体験から、様々なことを結び付けて考えるようになった。日常生活で好きな音楽やお店でものを見たときに、保育につなげて考える習慣ができた。

〈インタビューを終えての小考察〉

Dは大学における「総合表現Ⅲ」の授業で絵本『あみだだだ』の世界を表現した(写真4)。このグループはカホンのリズムを基調としながら、絵本中のあみだくじをロープで表現したり、文中のオノマトペをボディソックスの動きで表現するなど、ユニークな表現を創造していた。Dは音表現を担当した。動きに合わせた音をウッドブロック等で表現していたが、とりわけ最後に「チーン」と締めくくりの音を鳴らした部分が印象的であった。本人は授業のことをよく覚えており、「正解がない活動」に「何してんのやろ」と戸惑いながらも、グループで進めるにつれ「変な(個性的な)」方向に表現がひろがり、最終的には「いろんな表現ができて楽しかった」と心情の変化を語った。その変化について、終わってからこの「何してんのやろ」という部分が「好奇心の始まり」であり、それについて考え、自分なりの納得を得ることが「こうしなければならぬ」という考えからの脱却となり、この授業で鍛えられた部分だと感じている。また、この一連の経験が人それぞれの表現を尊重するという本人の保育観へとつながっていることを自己分析している。

さらに特筆すべき点は、総合的な表現活動の経験を表現活動のみならず日常の保育生活と結び付けて日々の保育に生かしている点である。具体的には、0歳児でまだ言葉の表出がない子どもも、身振り手振りや表情でさまざまな感情や伝えたいことを表現していることについて述べ、さらに、子どもに保育者の気持ち(特

に共感など)を伝える際にはオーバーなりアクションや表情の変化が重要であると語り、総合的な表現活動で経験した活動が0歳児の表現を読み解く基礎となっているし、動きと音で表現した事が、保育士の意思を伝える面でも大きい経験であったと述べていた。



(写真4) 『あみだだだ』発表の様子

インタビュー⑤ Eさん

卒業年：2019年3月 大学こども教育学部卒業

現在の状況：幼稚園勤務、現在2年目、年長クラス担当

インタビュー日時：2020年12月9日 19:00 - 20:15

インタビュー⑥とグループインタビューを行った。

【インタビュー内容】

- ① 在学中の総合的な表現活動を経験して残っている事柄
 - ・全く覚えていない。覚えていないからアンケートが書けなかった。
 - ・他の人がしているのは覚えている。布持って子どもの上に近づいていったこと、ビョーンとする楽器。
 - ・やりながら、「来年からは使わんやろな」と思っていた。
 - ・(同僚の)短大卒の人は、授業中に作ったというエプロンシアターや手袋人形を持っている。
- ② 日ごろの保育の様子や行事、表現の活動に関して感じていること
 - ・年長児は、絵本をもとにオペレッタの台本を作り、既成の曲に替え歌18曲つくる。セリフはなく歌とダンスですすめる。
 - ・年中児は、6月発表会は大人が考えたダンス、2月発表会は子どもと一緒に相談して決めたダンスをする。童謡曲を使うので歌詞の意味に添った動きを考える。

- ・学生時代によさこいサークルにいたから、振付案を出すことができる。ヒップホップ的な動きを入れてほしいという園長の意思を反映させることができるのが自分の役割である。
 - ・発表会の出し物はクラス単位で考案している。
- ③ 今後、保育の中で行ってみたい表現活動
- ・同僚同士で、保育をより良くしようとする話題になることはない。良くしよう、取り入れようというより、考える間もなく日々をこなしている。準備に追われる。こんなことがあった、どうしたらよかった、という話はしている。
 - ・手遊びはしない。子どもは手遊びに反応しなくなっている。半年に1回3ヶ月に1回、バス待っているときや、ごほうびです。
- ④ その他
- ・絵本は物語的なものを読む。言葉遊び系は読まない。
 - ・今は『エルマーの冒険』を何回かに分けて（つづきもので）読んでいます。発表会出し物につなげていけたらと考えている。
 - ・素話はしていない。
 - ・かるた、ことわざかるたは子どもたちは言葉を覚えている。
 - ・リトミックはしていない。
 - ・だるまさんがころんだ、や、はないちもんめ、大縄とびは、クラス内ではするときがある。保育者から遊びの提案をするのではなく、子どもが「このゆびとまれ」と遊びを提案している。
 - ・おにごっこは子ども同士でしている。鬼きめは足を出して子ども同士で決めている。

〈インタビューを終えての小考察〉

年中児、年長児の幼児教育をしたい、という意思を持ち幼稚園に就職したEは、在学中の「総合表現Ⅲ」において、駒形克己作『ごぶごぶごぼごぼ』の中に書かれたオノマトペを水の動きととらえ表現モチーフにしてグループ創作をしていた。その過程では、メンバーで意見を出しあい表現を試すことを経て、ある時点から、水が噴き出し流れ出す様子を半濁音で繰り返し発声し、空間を大きく使い、生き生きと表現するように変化していった。チームワークもよく、教員も印象的に記憶している創作表現であった（写真5）。しかし、

E自身は、全く覚えていない、と言う。

現在のEは勤務する幼稚園が力を入れている発表会でのオペレッタ、ダンスの取り組みに懸命であり、振付案を考案することが自分の役割だと認識している。発表会の出し物を見据えて読み聞かせをする絵本を選んでいることもわかる。現在のEは、日々の保育内容と、在学中に総合的な表現活動で経験したこととの照らし合わせをすることはないように感じられる。同僚同士、日々の準備では協力し合うが、その内容について熟考する間もないという現実も聞くことができた。

エプロンシアターや手袋人形のように、保育の現場でそのまま使える用具を在学中に作りたかったというEであるが、後述するインタビュー⑥の様子を聞き、次第に創作表現で使った手具や楽器のことを思い出すようになった。言葉遊び、リトミック、わらべうた遊びについてはこちらから質問した。特に今後していきたいという意識は持っていないようである。本インタビューではEは、在学中の総合的な表現活動について思い出し、インタビュー⑥内容を聞く時間となった。普段、保育内容について語ることの少ない中、設定できた機会となった。



（写真5） 半濁音を繰り返して

インタビュー⑥ Fさん

卒業年：2019年3月 大学こども教育学部卒業

現在の状況：保育園勤務、現在2年目、2歳児クラスを3人で担当

インタビュー日時：2020年12月9日 19:00 - 20:15

インタビュー⑤とグループインタビューを行った。

【インタビュー内容】

- ① 在学中の総合的な表現活動を経験して残っている事柄

- ・歌詞は覚えている。しみついている。
- ・表現力は養われた。
- ・自分たちで考えた。あの発想力は現場に出てから生きている。
- ・最中は、本当にこんなんでいいのかなと思いつけていた。見本があるわけでもないから。
- ・ボディソックスは覚えている。

② 日ごろの保育の様子や行事、表現の活動に関して感じていること

- ・子どもはちがう言語で会話すること、変なことばが好き。例えば「てんぶらてんてん」のような絵本の一場面を子どもは真似して言う。だから、インパクトつけて言おうと思う。

③ 今後、保育の中で行ってみたい表現活動

- ・保育のことだけを考えたけれど、現実はそうではない。
- ・遊び、ゲーム、ルールのあるゲーム、を取り入れていきたい。
- ・手遊び、座って部屋でできる体操を充実させたい。

④ その他

- ・言葉遊び系の絵本は、子どもに言わせている。子どもは耳につくワードを振りをつけて言う。それを見て自分も同じトーンで言ったり、同じ振りをつけて言っている。就職してからそのようにするようになった。
- ・リトミックはやったほうがいいと思うがしていない。ピアノを弾いたらできると思うが。
- ・2歳児なので、おおかみさんいままんじ、だるまさんがころんだ、はする。初めは保育者が鬼役をする。つぎに子どもと一緒に鬼役をする。鬼役をする子どもは替わっていくが保育者は毎回鬼役の子どもと一緒に鬼役をする。
- ・鬼ごっこは、保育者がいつも鬼役をする。

〈インタビューを終えての小考察〉

Fは在学中の「総合表現Ⅲ」において、ことばあそびうた『ぴっとんへべへべ』をもとにグループ創作していた。これは6人が様々な音高、音価、音量で「び」および「び」を言いながら、二手に分かれて引き合いをするなど、歌のリズム感を大きく変形させながら、

動きを使った創作表現に仕上げたものであった（写真6）。

現在Fは、「ちがう言語で会話」し「変なことば」を好む2歳児と、同じトーンで話し、同様に振りをつけて言って楽しむようになっている。在学中の総合的な表現活動での経験をもとに、現在の日々の保育活動においても自然に行っていることがわかる。

2歳児の保育では、保育者が一緒に活動し、例えば鬼役のようにいつも子どもと走っていく姿が求められる。非常に柔軟な対応で子どもの遊びに入り込むFの様子をうかがうことができた。「手遊び、座って部屋でできる体操」の充実を望んでいることから、日常の中に子どもたちと同じ感受性を楽しみたいという思いを持っており、在学中の総合的な表現活動での発想力を、「現場に出てから生きている」と捉えている。



(写真6) 半濁音 対 濁音 で会話

インタビュー⑦ Gさん

卒業年：2020年3月 大学こども教育学部卒業

現在の状況：こども園勤務8か月、1歳児クラスを5人で担任

インタビュー日時：2020年12月12日13:00 - 14:10

【インタビュー内容】

- ① 在学中の総合的な表現活動を経験して残っている事柄
- ・初めてボディソックスを着用して活動した。『あみだだだ』で何を伝えたいのかについて意見を出し合った。最初は何をどうすればよいのかわからず、全く意見が出なかった。
 - ・中間発表を経ることにより、表現の仕方を競い合うのではなく、他者から見てどう見えるのか、何を表したいのかについて、客観的にみることができた。表現に正解はないことにも気づけた。

- ・劇遊びやミュージカルはゴールが決まっているからやりやすいが、総合表現の授業はゴールは決まっていないからこそ、みんなで一緒にやるのが楽しかった。
- ② 日ごろの保育の様子や行事、表現の活動に関して感じていること
 - ・擬音を声に出す楽しさや面白さに気づき、子どもたちと日常の動作や絵本を読みながら声を出している。
 - ・1歳児の発達に応じた言葉かけを意識するようになった。描画の際に、自然と「ぐるぐる」などという声が出る子どももいる。『もこもこもこ』などの絵本を読むと、子どもたちが自ら体を動かしたり言葉を発したりする。保育者としても、読みながら自然と体で表現することもある。
- ③ 今後、保育の中で行ってみたい表現活動
 - ・絵本からことば・文字・色・素材などを思い浮かべるような、絵本から発展させた活動を行いたい。
- ④ その他
 - ・絵本を見るとき自身の姿勢の変化があった。
 - ・表現に正解はない、とらえ方の多様性が重要と感じた。

〈インタビューを終えての小考察〉

Gは卒業後まだ時間が浅いこともあり、在学中に受講した「総合表現Ⅰ」「総合表現Ⅱ」「総合表現Ⅲ」、それぞれの授業での活動内容や自身が感じたことをよく記憶していた。それは本人にも感性の豊かさや想像力が素地として備わっていたことも要因の一つであると考えられるが、総合的な表現活動を体験して、自身の表現のとらえ方の変化を感じていることがインタビューより理解できた。

「総合表現Ⅲ」の『あみだだだ』の作品創作では、ボディソックスを着用しての動きを担当しており、当初は何を表現すればよいのか、どう動けばよいかわからず、メンバーからは意見も出なかったとのことである。表現に正解がないことに気づくことができ、初めて動くことができるようになった様子であった。

日頃の保育では1歳児の保育にあたり、日常の活動でも多様な擬音語などを用いて言葉かけをすることを

本人は意識していると言う。自らも擬音語などを声に出す楽しさ、面白さを感じており、反応の少ない子どもへの働きかけについても、子どもが興味を向け自身も好きな絵本をもとに、声を出し、体を動かすなど、工夫しながら行っている様子であった。またどんな素材を用いて描画や制作などを行うと楽しいのかなどを考えるとのことである。保育者としてこのような感覚や思考を習得していることは非常に大切であり、領域を連携させた総合的な表現活動を体験したからこそ気づけたのではないかと考える。

Gは表現作品を創作する際、最後に作品発表をすることは重要な経験であり、他のグループの絵本の題材のとらえ方や表現の仕方の多様性を感じることができたことと捉えている。そして発表をする前の段階として中間発表があったことが、表現を客観的に見ることができ、自分たちのグループの創作・表現活動をより自由に行えたと感想を述べている。自らの思いを表現するだけではなく、周りに存在する人・物・現象などをどう感じ、捉えていくのかというような経験も大切であると言える。

Ⅳ. インタビュー調査からの考察

インタビュー調査後その内容を整理し、次にあげる三つの観点から、総合的な表現活動を体験することで本人がどのように感じ、どんな変化があったのかについて考察した。

1. 記憶に残っている授業内容について

7名の卒業生にインタビュー調査を行った結果、授業内容が記憶に深い卒業生4名と、ほとんど記憶にない卒業生3名に二分された。インタビュー調査を具体的に考察した結果、卒業生の記憶に残っている授業内容は大きく以下の二点である。

まず一点目として授業で経験した表現方法は、D（インタビュー④）が「何してんのやろ」、F（インタビュー⑥）が「こんなんでいいのかな」と思いながらやっていたと述べたように、これまでに経験したことのない活動であったことが伺えた。経験したことのない活動とは、「完成形がない、正解がない」活動である。活動当初は戸惑ったが、最終的にはD（インタビュー④）は「いろんな表現ができて楽しかった」、またG（イ

インタビュー⑦)は「ゴールが決まっていなかったからこそ楽しかった」と振り返っており、在学時の経験が既成概念からの脱却と表現の多様性に気づききっかけになったことが察せられた。

次に二点目として内容を覚えていないという卒業生も含め、表現活動で使用した道具や音は、強く記憶に残っていることがわかった。具体的には、ボディソックスや布、E(インタビュー⑤)が「ビヨーンとする楽器」と表現したビブラスラップなどの楽器、そしてオノマトペである。各道具の持ち味から、学生の視覚、聴覚、触覚など感覚機能が刺激を受けたことで表現が引き出され、オノマトペは、繰り返し唱えることで、音とリズムが学生の心や身体、意識に刷り込まれたのではないかと考えられる。このことから、在学中にできるだけ多様な感覚経験をすることが重要であるといえよう。

2. 保育に活かしている内容について

大学の授業で行った内容を直接的に保育場面で活用しているという意見は見られなかったが、対話を進めていくにつれ、「自身の表現力や発想力」と「子どもの表現の読み取りやそれらに対する働きかけ」の二点において経験が大きく活かされていることが浮かび上がった。

「自身の表現力・発想力」については、様々な楽器や素材を用いた経験、これまで見たことがない活動を模索するプロセス、一つのテーマについて話し合っただけの活動を進めた時間、音、体、素材、声などの多様な表現方法を複合的に組み合わせて表現を創出した経験などを通して、表現力や発想力が「鍛えられ」「現場でも生きている」と述べていた。保育者自身が感受性を働かせ、多様な表現方法を組み合わせ、表現を作り出す力を持つことは、保育者として大切にしたい資質である。

「子どもの表現の読み取りやそれらに対する働きかけ」については、とりわけ0, 1, 2歳の乳児との関わりにおいて発揮されているとの回答が複数見られた。まだ具体的な言葉による表現の少ない乳児の喃語や身振りを読み解くことや、保育者側から乳児に伝える際の表情やジェスチャーについての記述からは、子どもの発想、発声などを受け入れ、寄り添う力につながっていることが読み取れる。また、3歳児以上の担当者

からも「子どもが好きにやっている動き、しぐさ、動きを取り入れ、自分でも合わせてやったり劇に取り入れたりする」「オノマトペがおもしろい絵本を選んでいる」「粘土あそびからごっこ遊びへ広がっている」「声を出し、体を動かし、どんな素材を用いて制作を行うと楽しいかなど考える」などの意見がみられた。保育者として働く中で、子どもの表現を受け止め、柔軟に取り入れて保育を展開していることが伺える。

以上の記述から、本授業が意図した、「子どもの遊びや表現を総合的に捉え展開できる感性を開く」という授業のねらいが達成できていると考えられる。

3. 表現活動に対する意識、とらえ方について

インタビューで時間をとって話す中で、在学時に経験した表現方法を思い出すことができた。ボディソックス、布、「ビヨーンとする楽器」を使ったことによって、思い切った表現をすることができたとも語っている。これらの道具の持つ素材感、つまり、肌触り、重さ、なびく様子、音によって、表現が引き出された。一方、道具を使わず、五七調の言葉、濁音・半濁音の繰り返しや応答、オノマトペを繰り返して言うことによって、心地よいリズムを感じるようになっていった。「動き」と「声」を伴う表現になっていったことを、記憶の中から聞き出すことが出来た。

このように在学時「表現」のとらえ方を広げる経験をしたのであるが、これらの経験は保育者となった現在、どのような意味を持つものとなっているのだろうか。0歳児を担当するD(インタビュー④)は、0歳児が発する、言葉ではない表現、動きと音での表現を読み解く基礎になった、と明確に語っている。1歳児を担当するG(インタビュー⑦)も擬音で返したり、オノマトペの絵本を身体を動かしながら読むようになっていたことを挙げ、保育者としての自らの表現の変容を自覚している。2歳児を担当するF(インタビュー⑥)は、2歳児が発する言葉を、そのトーンで振りも付けて返してやりとりを楽しむようになっていた。これら、子どもの心情へのより添いと、子どもの表現を尊重しそのままの姿勢で応答しようとする保育者としての土壌が育まれていると考える。

3歳児を担当しているB(インタビュー②)とC(インタビュー③)は、日々の保育の中での子どもの表現をキャッチし表現や遊びを広げていきたいと考え、表

現活動のあり方への問いかけをしながら自分なりの仕方を模索していることがわかった。

これらに対して、幼稚園勤務のA(インタビュー①)、E(インタビュー⑤)は、勤務する園のカリキュラムや行事をこなすことに懸命であり、表現活動の本質について考え直したり、職員同士で意見を交わす機会は持っていない。今回のインタビューで、在学中の総合表現の経験を思い出す機会にはなったものの、日々の保育を変えていこうとするエネルギーにはなっていない。

総合的な表現活動で経験したものは、オープンスペース、すなわち空間を大きく使用し、演者と観者が同じ空間にいて演者は観者の表現も引き起こす、いわば会衆参加型であった。この創作過程で「中間発表」と称し、自分たちを客観視し、同時に見る立場からどのように感じるのかを想定し、より、共々に楽しめる創作表現へと修正していった。表現を引き起こす心の動きと、伝えようとする方向性、その意味を読みとろうとする意志は、まさしくD(インタビュー④)が述べているようにお互いへの「好奇心」であろう。相互の表現を受け止めあい、創作表現として作り上げていく中で、育まれてきた保育者の資質といえるであろう。その資質を就職先の保育園・幼稚園で発揮できるようになることを、筆者らは望む。そのために保育者養成校ができることは何か、まだまだ問いかけと試みは続く。

V. 総合的な表現活動の意義と今後の課題

総合表現を経験した卒業生へのアンケート調査及びインタビュー調査は、卒業生の大学での学びと現場の保育を結び付ける時間となるとともに、筆者らも改めて「総合表現」について考える機会となった。従来の劇遊びやミュージカルといった総合芸術としての活動が主流であった保育の表現活動に疑問を持ち、もっと自由で、子どもの豊かな表現を受け止めることのできる感性をもった保育者の養成を目指して科目担当教員で模索しながら総合表現活動に取り組んできており、それは現在も継続中である。子どもの表現に決まった型がないように、総合表現の活動も決まった正解があるのではない。これらの表現領域を連携させた活動の経験が、個々の子どもの表現を受け止めることや表現

形態に対する自由な発想・表現の多様性に気付く機会となったことが、今回の卒業生への追跡調査から捉えることができた。

しかし、総合的な表現活動の授業内容についての記憶がないことからアンケートに回答できなかった」とのインタビューでの回答にもみられるように、授業として取り組んでいる総合的な表現活動が日々の保育活動にどのように結びついていくのかという学生の疑問について、学生にも理解しやすく提示できるようにすることが、今後授業を展開していく上での課題と考えられる。加えて、今回のアンケート調査及びインタビュー調査の実施については回答者・対象者が限られ、保育職に前向きに取り組んでいる者が対象となった可能性もある。総合的な表現活動がすべての保育職に就いている卒業生にプラス効果があったかどうかについては、今後、調査方法を検討した上でさらなる調査が必要と考える。

また、回答に見られた「正解のない表現活動」を展開していくためには、授業担当者としても学生に高度な完成形を求めることに主眼を置くのではなく、学生一人ひとりの表現の変化・成長や自由な表現への気づきを大切にしていける必要があると考える。今後も担当教員のそれぞれの専門性を大切にしたいうえで、学生が多様な感覚経験をし、表現する楽しさを体験できるような授業が展開できるよう工夫していきたい。

付記

本稿は日本保育学会第74回大会ポスター発表「保育者養成課程での「総合的な表現活動」を受講した学生への追跡調査からの考察」(2021年5月、於：富山大学(オンライン開催))の内容を整理し、加筆したものである。

本研究におけるアンケート調査は調査目的を明記し無記名で回答を得、個人が特定できない方式で実施した。また、インタビュー調査の実施にあたっては、予めインタビュー内容を伝えた上で承諾を得た卒業生を対象とし、その内容の記載についても個人が特定できないよう配慮した。

注

「保育者養成における領域『表現』へのクロスカリキュ

ラム導入に関する検討」平成 26-28 年度文部科学省科学研究費助成金（基盤研究 C）研究成果報告書（課題番号 26381297）智原江美・鍋島恵美・和田幸子・田中慈子・下口美帆（2017）において報告している。

引用・参考文献

- 岡林典子・佐野仁美（2016）「オノマトペと動きによる表現活動に関する考察：—絵本を用いた実践をもとに—」『学校音楽教育研究』20.pp. 219-220
- 今由佳里（2015）「地域の音楽振興を目指した大学生の取組みとアート・マネジメント能力：音楽を専門としない学生によるミュージカル公演開催までの軌跡をとおして」『関西楽理研究』32.pp. 113-123
- 厚生労働省（2017）保育所保育指針
- 文部科学省（2017）幼稚園教育要領
- 山田悠莉・滝沢ほだか・横田典子（2019）「造形・音楽・身体表現を連携させた保育内容『表現』の授業実践(6)－発表内容から課題提示順序を振り返る－」『日本保育学会第 72 回大会論文集』 pp.1209-1210

表現作品資料

- スージー・リー（2009）『なみ』講談社（インタビュー②）
- 元永定正（1999）『いろながれかたちうごいてぱびふぺぱ』光村教育図書（インタビュー③）
- 谷川俊太郎・元永定正・中辻悦子（2014）『あみだだだ』福音館書店（インタビュー④、⑦）
- 駒形克己（1999）『ごぶごぶごぼごぼ』福音館書店（インタビュー⑤）
- おおたか静流詞曲（2005）「ぴっとんへべへべ」NHK『にほんごであそぼ』（インタビュー⑥）

